

心臓手術において、心臓を止めないオフポンプ手術や、局所麻酔下で行うアウェイク手術、ロボット支援手術などを率先して導入してきたという渡邊剛氏。それを実現させてきた思いや背景について話を聞いた。

— 医師を志した経緯や背景は何でしょうか。

渡邊 もともと手先は器用でした。中学・高校の時は、文系向きではないとは分かっていたので、行くとしたら理系だろうとは考えながら学生生活を送っていました。入学した麻布中学校・高等学校は非常に自由な学校で、多種多様な人がいました。ちょうど大学紛争のまっただ中で、東大紛争や日大紛争が起った直後。都立高校でさえ学生運動が華やかでした。私が入学した学校も紛争で荒れ始めました。まだ中で、東大紛争や日大紛争

して、ロツクアウトにならなければなりません。そこで、言われた通りに従うことや、厳しく指導されることとは無縁な学生生活を過ごしました。勉強はそこそこしかできなかつたのですが、発想の自由さや、「人間は縛られて生きるものではない」という感覚がこの時に育ちましたね。

こうした時代背景や学生生活を通じてアウトラインのような存在にひかれたところで、手塚治虫の「ブラック・ジャック」に出合い、医師を志したのです。ブラック・ジャックは、作中で「デウトロー」や「金の亡者」と言われていますが、やっぱりハートがある。そして、天才的に勉強ができる人ではなく、手先の器用さがなければそのようにはなれない。そうした姿に憧れたことで、外科医がいいのではないかと思いました。そして、自分が得意と感じていた、手先の器用さを生かした分野で何が一番面白いかと考え、出てきたのが心臓血管外科です。やりがいがあるし、自分ならやっていけると考えました。

— オフポンプ手術や内視鏡手術、ロボット支援手術などを率先して取り組んだ背景は。

渡邊 新しいことを求めていかざるを得なかつたのは、自ら執刀し、同時に術後管理をするという経験が他の人より10年早かつたからでしょう。国内ではこの分野は一般的に40歳で手術を1人でやれるようになるとと言われますが、私は30歳でドイツに留学し、手術が



ニューハート・ワタナベ国際病院
総長

渡邊 剛

わたなべ ごう
金沢大学医学部卒業後、金沢大学第一外科に入局。ドイツ学術交流会(DAAD)奨学生としてドイツのハノーバー医科大学に留学。富山大学助教授、金沢大学心肺総合外科教授、東京医科大学心臓外科初代教授、国際医療福祉大学三田病院心臓外科客員教授、帝京大学医学部客員教授など経て、2014年より現職



ドイツへの留学で心臓手術の腕を磨いてきた

できる環境に身を置きました。そこで患者さんの術後に接し、負担の少ない方法を探していった結果、人工心肺を使わないオフポンプ手術や、小さな切開で行える内視鏡手術などに行き着いたのです。

それらをやると決めた時に邪魔をするのは、「一般的ではない」「やつたら何か言われる」という周りの目です。ただ、私は自分が正しいと思った道は誰にも曲げることはできないと固く信じていましたので、何か言われても動じることはありませんでした。患者さんにとつて良い治療だという確固たる自信があつたので、言いたい人には勝手に言わせておいたので、言いたい人には勝手に言わせておいたらしいという気持ちでいましたね。

— ドイツではどのように学んできたので

いい仕事をすればいいポジションが回ってくる

渡邊 日本と異なり、ドイツでは2~3カ月

で執刀医になることも可能でした。もちろん、いきなり執刀を任されるわけではありません。

与えられた仕事を一生懸命に、そして完璧にこなせば「次は渡邊にやらせよう」となっていきます。留学先の教授や助教授、講師など、皆が私のことを認めてくれればチャンスは自然と来るのです。私の哲学でもあるのですが、「いい仕事をすればいいポジションが回ってくる

」と考えてやつてきました。そういう人は周りが放っておかないと。もちろん、手術で余った血管をもらって縫うなど、練習も毎日欠かさず行っていました。最後の頃は毎日2~3件の手術に立ち会い、週に5例ぐらい執刀していましたね。やはり、外科医は常に手術をしていないと駄目です。経験数は何物にも変えられない力でしよう。

— 心臓のロボット支援手術も国内で一から作っているようなのですね。

渡邊 ロボット支援手術との出会いも本当にご縁で、国内導入が決まってすぐに金沢大学にも置いてもらいました。ロボットは外科の歴史を劇的に変えるものだと直感したので、すぐに米国へ研修に行き、使い始めました。実際、使つてみると正確さも違います。患者さんの負担を減らすツールとしては非常に素晴らしいものでした。ただ、ノウハウの必要な手術であり、もし事故が起これば、心臓なので命取りになる危険が高まります。それだけに正しく扱える人に扱つてほしいと思い、教育も行っています。また、医療は技術だけでなく、コストも大切です。現状では自由診療でしか行えないため、もっと多くの人が大きな費用の負担なく受けられる医療にしなければならないとも思っています。

— 帰国してからは富山大学病院で心臓血管外科の立ち上げに関わったと聞きました。

渡邊 富山に行つた当初は手術のほぼない医局でしたので、一から患者さんを集め、盛り上げていきました。最初のうちは、周りの医療機関にとつて私がどのような医師か分かりませんので、挨拶に行き、紹介してもらった患者さんを元気にして自宅にお帰りいただく